

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2021 石井剛



たたかう「文」

言語の暴力と希望について

学問とその“悪”について

中動態的な悪

日本の軍人は自発的に加害したわけではなかった（能動態）。かといって強制的に加害させられたわけでもなかった（受動態）。なんとなく、まわりの空気に押されて、いっしょに加害するはめに「陥ってしまった」（中動態）。少なくとも自分たちではそう感じていた。

だから彼らは、みずからの加害行為について、罪も責任も感じず、事実すらまともに記憶しなかった。人間を生きたまま解剖し、殺すことについて、キセルのような軽犯罪と同じくらいにしか感じていなかった。

さきほどの元軍医の証言が教えてくれるのは、そういう驚くべき軽薄さであり、無責任であり、つまりは「愚かさ」である。その軽さ＝愚かさは、加害者の中動態的なかまえによって、すなわち、加害に加担しつつも、その加担を能動的に選び取ったという自覚がない、自発性にも強制にも分けられない態度によって生み出されている。

悪の愚かさとは、加害の中動的な性格のことである。ぼくたちは中動態の論理のなかで、いともたやすく巨大な悪に加担してしまう。

—東浩紀、前掲書、42

システムは中動的に生成して歴史のモメンタムを構成すると「勢」となる。システムは人の外側にあるのではなく、人はシステムの中で行為する。

道とはあたかも「行」のようなものである。気が化してひろがり行き、生成してやむことがない。だから「道」というのだ。『易』には「一陰一陽を道という」とあり、『尚書』洪範篇には、「五行とは、一に曰く水、二に曰く火、三に曰く木、四に曰く金、五に曰く土」とある。
「行」とはまた道の通称でもある。

戴震《孟子字義疏證》卷中《天道》175

シェリング

『人間的自由の本質』

- 悪とは実存に対する元底（Urground）——被造的な存在者のうちで現勢化に努力する限りの——にほかならず、従って実際に、自然のうちに働いている根底のより高い勢位（Potenz）にすぎないからである。94
 - 善の決定的出現とともに、悪もまた初めて全く決定的にかつ悪として出現する。97
 - それ故に一つの普遍的な悪があるのである。これは元初的なものではなくして、神の顕示が起こるに至ったその元初から、根底の反作用によって呼び醒されたものであって、決して実現には到達しないけれども、絶えずこれに向かって努力しているものである。この普遍的悪が認識されてのちに初めて、善と悪とを人間のうちにおいてもまた把握するということが可能である。99
-

性とはおおもとの素朴な材質のことであり、人為的な努力によって文と秩序が全うされるのだ。

— 『荀子』 礼論

性者，本始材朴也；偽者，文理隆盛也。

— 《荀子》 禮論

言語が病的でないことは不可能である。したがって、文辞が巧妙になるほど、病はひどいものとなるのだ。その瀬戸際をなすのは、「文言」か「質言」かということのみである。〔中略〕文が質から離れるほど、表象は益々進み、病もまたひどくなるのである。

章炳麟a「正名雜義」219

心で推し量ることを「恕」、周到にものごとを観察することを「忠」という。一を聞いて十を知り、一つのことを挙げて三つのことに思い至るのは「恕」のなせることだ。〔中略〕「恕」を大事にする人は類比に長けている。仮に類比によってすべてのことを知ることができるとするなら、一定の基準さえあれば四角いものも円いものも精査できる。だが、ものごとは複雑で、四角や円のように計測できるものではないのだ。だから基準に頼ろうとする人は行きづまるし、類比にこだわる人は疑念を持つようになる。周到にものごとを観察し、きざしをとらえてその構造を見きわめるのは「忠」のなせるわざだ。つまり、通則を立てて遠いものを知るのは「恕」であり、パターンを細かく観察するのは「忠」である。

章炳麟b 「訂孔」下426

道可道非常道，名可名非常名。

——《老子》

南海之帝為儵，北海之帝為忽，中央之帝為渾沌。儵與忽時相與遇於渾沌之地，渾沌待之甚善。儵與忽謀報渾沌之德，曰：「人皆有七竅，以視聽食息，此獨無有，嘗試鑿之。」日鑿一竅，七日而渾沌死。

——《莊子》應帝王

子路が言った、「衛の殿さまが先生をお迎えして政治をなさることになれば、先生は何から先きになさいますか。」
先生はいわれた。「せめては名を正すことだね。」

子路曰：衛君待子而問政，子將奚先？子曰：必也正名乎！

——《論語》子路249

子路が石門で泊った。門番が「どちらからか。」といたので、子路が「孔の家からだ。」というのと、「それは、だめなのを知りながらやっている方ですな。」と聞いた。

子路宿於石門。晨門曰：「奚自？」子路曰：「自孔氏。」曰：「是知其不可而為之者歟？」

— 《論語》 憲問

「人格的なるもののみが人 格的なるものを癒しうる」

シェリング『人間的自由の本質』97





悪を克服するためにわたしたちはいかにして「行う」べきか？

最悪の悪を避けることはいかにして可能か？

原子力の悪

主の言葉が再びヨナに臨んだ。「さあ、大いなる都ニエベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」

ヨナは主の命令どおり、直ちにニエベに行った。ニエベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。

「あと四十日すれば、ニエベの都は滅びる。」

旧約聖書「ヨナ書」

破局の到来を告げる言葉は、問題になっている破局の生起を
防止することに成功する。

デュピュイ 『ありえないことが現実になるとき』 212

最悪の悪とは、自らの力によって癒やすことができないとわかっていることをそれでも行うことである。その悪に加担しないためには、自らの力を超えた力によってもたらされる不可避な破滅がやがて到来することを宣言すべきである。システムの悪は回避できないからだ。回避できないことを回避できると公言することはすなわち最悪の悪に加担することである。

民主主義の悪

悪の生起は防ぐことができない。だからわたしたちは悪を克服することができる。悪を克服するためには悪を記録しなければならない。それが「文」による抵抗である。

「文」による抵抗

——「消極」と「積極」

政治が日に日によくなることを「積極」といい、日に日に悪くなることを「消極」と言う。「消極」であれば、事を立てるには不十分である。しかしそれでも事は立つのだ。慎重に進退を見極めて先王の教化の源を理解しているものこそが誠実なのだ。

章炳麟a 「消極」 312-313

「文」による世界変革

イデオロギイとしての文芸作品はすべて、一定の社会生活が人間の頭脳に反映して産み出されたものである。革命的文芸は、人民生活が革命作家の頭脳に反映して産み出されたものである。人民生活の中に、もともと、文学・芸術の原料の鉱脈が存在している。これは自然形態のものであり、荒けずりのものであるが、同時にもっとも生き生きした、もっとも豊かな、もっとも基本的なものである。この点で言えば、それらは、すべての文学・芸術をして顔色なからしめるものである。それらは、文学・芸術の、取りつくせず汲みつくせぬ唯一の源泉である。

毛沢東『文芸講話』30

人類活動自体の悪

救救孩子.....

——魯迅『狂人日記』



宇宙的希望

人類の滅亡と「文」

「文」の場としての大学

As A Space That Allows Change



先生が匡の土地で危険にあわれたときにいわれた、「文王はもはやなくなられたが、その文化はここに伝わっているぞ。天がこの文化を滅ぼそうとするなら、後代のわが身はこの文化にたずさわれないはずだ。天がこの文化を滅ぼさないからには、匡の連中ごとき、わが身をどうしようぞ。

文王既没，文不在茲乎！天之將喪斯文也，後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也，匡人其如予何？

《論語》子罕168



2020年3月26日撮影

参考文献

ジャン=ピエール・デュピュイ『ありえないことが現実になるとき』、桑田光平・本田貴久訳、ちくま学芸文庫、2020年

森村誠一『新版 悪魔の飽食』、角川文庫、1983年

東浩紀「悪の愚かさについて2、あるいは原発事故と中動態の記憶」、『ゲンロン 11』、ゲンロン、2020年

國分功一郎・熊谷晋一郎『〈責任〉の生成』、新曜社、2020年

シェリング『人間的自由の本質』、西谷啓治訳、岩波文庫、1951年

國分功一郎『中動態の世界』、医学書院、2017年

中島隆博・石井剛『ことばを紡ぐための哲学』、白水社、2019年

毛沢東『文芸講話』、竹内好訳、岩波文庫、1956年

戴震『戴震全書 6』、黄山書社、1995年

章炳麟^a『尙書 初刻本 重定本』、生活・読書・新知三聯書店、1998年

章炳麟^b『章太炎全集』(三)、上海人民出版社、1984年

東京大学東アジア藝文書院『私たちはどのような世界を想像すべきか』、トランスビュー、2021年

金谷治訳注『論語』、岩波文庫、1963年(1999年改訳版)

石井剛「「同ぜず」のために」、『現代思想』42(4)、2014年
